

41606

教科書文庫

4
810
41-1906
2000301807

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

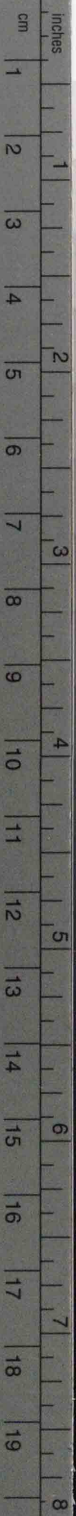


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

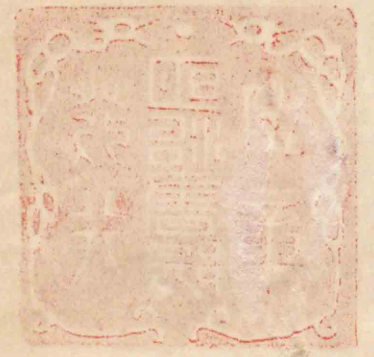


3759
Dc8
資料室

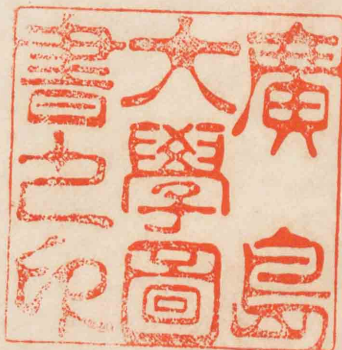
訂海中等國語讀本
落合直文編
卷一



Page
800



375.9
Oc 8



再訂中等國語讀本 卷一目次

一、 日章旗	一
二、 旅順背面の攻撃	六
三、 勝鬨(新體詩)	一四
四、 春五章	一六
一、 水村	一六
二、 土筆	一七
三、 神樂殿	一八
四、 正午	一八

五、	渡口	一九
○五、	自然の音楽	一九
○六、	花と蟲	二二
七、	生活	二七
八、	智慧の使用につきて	三〇
九、	植物問答(新體詩)	三四
一〇、	友人にわくる書	三六
一一、	功臣の末路	三七
一二、	初度の歐洲行	四七
一三、	水浴	五四

一四、	太氣中の水分	五九
一五、	江の嶋鎌倉	六三
一六、	遠足(新體詩)	六九
一七、	少年時代の苦學	七一
一八、	學問の活用	七九
○一九、	トマス、エヂソン	八三
二〇、	硝子	九一
○二一、	ブンゼンの逸事	九五
二二、	公子の躰方を申し遣す書	一〇〇
二三、	親不知の濱	一〇三

○二四、 アラビア馬その一……………一〇七

○二五、 アラビア馬その二……………一一二

○二六、 森林……………一二七

○二七、 天の橋立……………一二一

二八、 入船出船(新體詩)……………一二六

○二九、 ボアソナード氏を送る詞……………一二七

○三〇、 故郷……………一三一

卷一目次終



再訂中等國語讀本卷一

一、 日章旗

日章旗は、わが大日本帝國の國旗であります。諸外國の國旗に、それぞれ、大切な意味が含まれて居るやうに、日本の國旗にも、深い意味があるのであります。私は、今、わが日章旗を、色の上からと、地理の上からと、祭祀といふことの上からと、國體の上からとに分けて、御話いたさうと思ひます。

まづ、色の上からいへば、全體、色そのものは、たゞ、赤いのが赤く、黒いのが黒いまでで、何というて、別段、意味のあるのではありません。志かし、その色を見る人には、種々な感じを起させて、それが、色の意味のやうに思はれるものであります。さうして、その感じは、人々によつて、いくらかの相違はあるにしても、大體にわたっては、一致して居ります。

わが日章旗は、白地に、赤でゑがかれてあります。その白色は、至つて、汚のない、清淨潔白の意味を表して、實に、結構な色合であります。西洋では、これに、靜とか

平和とかいふ意味を寓せて居ります。困ることは、軍の時の降參旗も、この色であるが、これは、二心のないことを表すものらしいのです。赤色は、日本も、支那も、西洋も、皆、ななじ意味をもたせて、誠を表します。赤心、丹心などいふ語も、これらの意味から出たのでせう。西洋では、また、熱心といふ意味を、これにもたせて居ります。熱心の極は劇しくなり、そのつまり、あぶないといふことにもなるので、すべての警戒の標などにも、赤色が用ゐられてあります。そこで、日本の國旗は、その熱心、その誠の塊であるから、いざ破裂といふ曉

は、ひどく、あぶないものであるが、平和の白色で、これを包んで居るから、心配はないのです。志かし、外國人の仕向によつては、いつ、破裂して、彼等を驚すかも知れませぬ。これ、全く、日本人の、きつい氣象を表した、好い標本ではありませぬか。

地理上からいへば、日本は、東に位して居る、日の出づる國であります。日章旗は、この意味をも表して居ります。志かも、太陽が、東から出て、次第に、その光を、西にたよぼすやうに、東の勢力を、ますます、西に及さうとする、進取の氣象が籠つて見えます。

つぎに、祭祀上の事ですが、いづれの國の國旗も、みな、祭祀の意味を含んで居ります。祭祀といふ語が、よく、あたつて居らぬなら、敬神といつても宜いのです。皇祖天照大神は、また、日の神と申します。その日の神の御影に象られたのは、知らず識らずの間に、神の御護があるやうな心持がして、國民の欽仰の念を強むるものと思ひます。

國體の上からいへば、わが日本は、上に、萬世一系の天皇を戴いて、その、天壤無窮であることは、恰も、太陽が、始もなく、終もなく、また、一つの缺點もなく、眞丸に

耀いて居るやうなものであるから、これに優つた、よい章は、他に、決して、あるまいと信じます。

これは、私一人の考であるが、つまり、日本の國旗は、いかなる點からしても、いひ分のない章と思ひます。どうか、この國旗の精神を、全國に、普く、及して、國民の愛國心を引き立て、日章旗の名譽を、海外までも耀したいと存じます。(松波仁一郎講演筆記)

二、旅順背面の攻撃

旅順の地勢は、一方は開けて、海に面し、三方は、山に

て包まれたり。この背面なる山のうちに、高さ、二百三メートルの高地あり。

抑も、この山の位置と高さとは、旅順の全部を見とほすによき所なれば、こゝを占領すると、せざるとは、敵の運命の分るゝところなり。

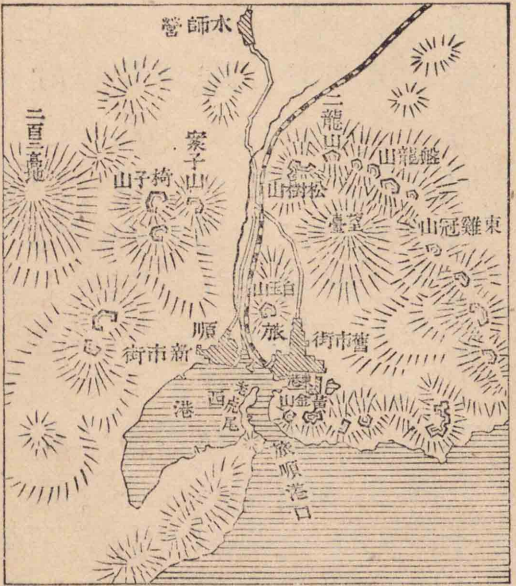
されば、この高地に施せる、敵の防禦工事たるや、實に、堅固を極めぬ。まづ、わが攻め登らむとする通路にあたれる山の裾には、鐵條網を、二重に、張り亘し、次に、これに掩護せられて、第一散兵壕あり。やゝ、少し上に、また、第二散兵壕あり。志かして、山上には、土石を、高く、

積み上げて、たやすく、攀ぢがたき、要害よき陣地を設けぬ。

敵は、かく、三段に、備を立てて、わが攻撃を待ちかけたり。わが軍は、十一月二十六日より、第四回の總攻撃をはじめ、松樹山、二龍山、東雞冠山の三砲臺に向つて、一齊攻撃をなすと同時に、二百三高地をも占領すべき計畫を立てぬ。

友安少將の率ゐたる一隊は、この高地の西方より、豫め、掘り開きたる通路によりて、第一鐵條網の直下まで進み行き、こゝに、陣地を取りて、以て、日の暮る、

を待てり。



やがて、日は暮れぬ。すはこそと、第一列、まづ、躍り進まむとすれば、山上の敵壘より打ち出す彈丸は、中空にひかりて、わが兵の前進を照し、同時に、小銃を、雨の如く射かけられ、爆薬は擲げ下され、石塊は推し落されて、殆ど、進むこと能はず。そのありさま、實に、おそろしともれおろし。

かくの如くなれば、この夜は、恨を吞んで、計畫を更め、翌日の白晝に、更に、攻撃することに決し、一隊の將士は、この、恐しき鐵條網下に、夜を明せり。

廿八日の曉、漸く、志らむ頃より、殷なる砲聲は、わが陣地より起れり。これ、わが砲隊が、歩兵の前進を、容易くせむ爲に、敵壘に、猛烈なる砲火を注ぎかくるにてありき。既に、この助あり。わが兵、いかでか奮はざらむ。勇氣、日頃に、百倍し、ひたすら、時の來るを待つ。

時は來れり。天地に轟く喊の聲は、山腹に起りぬ。衆みな、非常なる勇氣を以て、山上、目がけて、驅け登れり。

然るに、山上より打ち出す敵の大砲、小銃、機關砲、擲げ出す爆裂彈、石塊、木片等は、雨霰の如く、到底、面を向くべくもあらず。わが兵屈せず、味方の死體を乗り超え、乗り超え、疾風の如くに前進せり。後方より望み見るもの、皆、その、壯烈なる振舞に泣かざるはなし。

第一の鐵條網は、既に、わが砲擊によりて、破壊せられたり。わが兵は、その破間より進入して、金切剪を以て、第二鐵條網を切斷し、全隊の兵士は、見る見るうちに、敵の第一散兵壕に達しぬ。

然れども、敵も、また、音に聞えたる歐洲無雙の強兵

なれば、容易に、退かず、抵抗、頗る、勉む。加ふるに、壕には、堅固なる、掩蓋あり。わが砲撃のため、處々、破壊せられたりと雖も、多人數が、躍り込み得べき程の破口には、あらず。横手には、敵の通行口あれども、これ、亦、狭くして、進入に、便ならず。志かして、山上の射撃は、いよいよ、猛烈となり來れり。

爰に、わいてか、一大奇策は行はれぬ。そは、外ならず、麥酒の空瓶に、石油を入れ、これを、敵壕の掩蓋に投げつけ、石油の、木材を濕せるを見すまして、點火せる囊を投じて、これを、焼き棄つるなりき。瓶は、雨の如く投

げられ、火は、熾に、發れり。これには、さすがの敵も、あわてさわぎ、或は、うちじにし、或は、生きて、山上に遁れ、壕中、また、一兵を止めざるに至れり。第二散兵壕の激戦も、決して、これに遜らざりき。

最後なる山上の堅壘は、二十九日の一晝夜、激戦したれども、なほ、落ちず。三十日の早朝、椅子山、案子山等より打ちかけたる砲火を浴びながら、苦戦終日、遂に、午後八時に至りて、漸く、これを占領するを得たり。

占領の當夜、わが軍は、豫め、敵の逆襲を期して、直に、防禦工事を施したるが、果して、十二月一日午前三時、

敵、逆襲し來りぬ。その勢、潮の、一時に、寄せ來るが如し。わが兵、必死となりて、防戦したれども、衆寡、遂に、敵せず、一たび、これを失ひて、また、これを奪ひ回し、かくするること、三度にして、漸く、占領を、確にするを得たり。

旅順の敵艦隊は、今や、眼下に見わたされ、生殺の權、全く、わが手にあり。例へば、高臺より、池中の鴨を望むがごとし。射て、これを、膳に上すも、また、數日のうちにあらむ。(成蹊隨筆)

三、 勝鬨 (中村秋香)

大砲小砲鬨のこゑ、

天やくづるゝ地か碎くる、

あなめざましや、

わも志ろや、

大浪翻して衝き入る皇軍、

雪類を打つてみだるゝ敵兵。

萬歳唱ふる勝鬨は、

山をうごかし谷をゆする、

あなこゝちよや、

いさましや、

奉天城頭けぶりのひまに、
ほのぼの見ゆる朝日の御旗。

四、春五章

一、水村

舟は、枝川に入る。

岸の菜の花、影を浮べて、山吹よりもうつくしく、若
蘆芽をふきて、一寸ばかりも、水を出てたり。

高き低き、幾戸の藁屋、わのづから、村を成して、行く
に橋あり、濟るに舟あり。桃紅に、柳緑に、春の風、ゆるや

かに吹く。(成蹊隨筆)

二、土筆

郊外に出でて、土筆を摘む。

伸び過ぎて、瘦せたるもの、肥えて、首、なほ、土に埋み
たるもの、水筆めきて、柔きもの、眞書に似て、剛きもの、
長き、短き、太き、細き、林の如く、並び立てり。

得たりと、一人がいへば、二人も、三人も、一ところに
集りて、探す。先立たむとて、田の水に、足踏み入るゝも
あれば、後れたるは、却つて、摘み洩らしたるを、折りも
て行く。

雲なく、風なく、霞をちこちの森を籠めて、日影暖けし。劣らじと、土筆の傍に、首を擡ぐる董あり。(大和田建樹)

三、神樂殿

立木、物舊りたる社あり。引きたる注連さへ朽ち果てたるは、宮守の家、遠きにやあらむ。來りて、箒執る人もなれば、水鉢ともいはず、燈籠ともいはず、散りかさなれる花、雪の如し。春靜なる神樂殿に吹き寄せられたるは、今も、風面白く、蝶と共に舞ふ。(大和田建樹)

四、正午

一もと柳の垂れたる蔭に、床几ならべて、團子を賣

る。腰懸けて、煙吹く客あり。煤びたる釜の下焚きつくる老婆あり。日、まさに、正午なるべし。庭鳥、一聲うたひて、花は、盆の上まで散る。(大和田建樹)

五、渡口

待てども人なく、渡守は、遂に、眠りぬ。鶯啼けども、醒めず、雲雀謠へども知らず。膏の如き春の水は、散りくる花を漂はせて、舟を洗ひ、また、岸を打つ。(大和田建樹)

五、自然の音樂

聲の調子に、一定の高低ありて、節面白く、鳴り響く

を、音樂といふ。琴、笛、三味線、ピアノ、オルガン、唱歌などの音曲は、通例、いふ所の音樂なり。されど、かゝる人爲の音樂の外に、自然の音樂ともいふべきものあり。鶯、雲雀、松蟲の聲など、これなり。その他、心を留めて、萬物の聲を聞けば、松風にも、水の聲にも、自然に、美しき調はあるなり。鶏も歌ひ、鳥も鳴く。雀、雲雀、山がらなど、百鳥の聲、皆、音樂なり。鶯の、高き天に歌ひ、鳩の、低き梢に鳴く。これも、また、音樂なり。或鳥の音は、笛の如く、或鳥の音は、琴の如く、また、或鳥の音は、胡弓の如し。ひぐらしの聲に、夕日沈めば、松蟲、鈴蟲、機織、こぼる

ぎなど鳴き出づ。或は、金の板を敲くがごとく、或は、銀の鈴を振るが如し。蛙、蟬、蜂など、皆、それぞれに、樂を奏す。草を吹く風、樹を吹く風、空高く吹く風など、風も、各、その音色を異にす。或は、琴の如く、或は、笙の如く、或は、箏の如し。

水の音樂は、更に、おもゑろし。泉の水の湧き出づる音は、琴、尺八、ピアノの曲とも聽くべく、落葉をくゞる細き流の音は、琵琶、月琴の調にも似たり。軒の雨垂を、豆太鼓の音に喩へむか、瀑布の、どうどうと、落つるは、大太鼓の響にも喩ふべからむ。たゞ、彼の、大海の波の

音のものすごく、勇しきに至りては、また、喩ふべきものもなし。(坪内雄藏)

六、花と蟲

花と蟲とは、まことに、離るべからざる密接の關係を有するものなり。われらは、彼の、美しき胡蝶の羽毛を見る毎に、直に、愛らしき花の瓣を聯想することゝ禁ずる能はず。されば、古より、胡蝶を指して、花の精などいひ傳へたる話も、少からず。

花の、蟲に類似したるは、ひとり、その色のみにあら

で、その形さへも、よく、相似たるものあり。トリニダード嶋に産する、ある植物の如きは、その美麗なる色、その翩々たる形、最も、よく、蝶に似たり。されば、土人、これを呼びて、植物界の蝶といふ。この種の植物の中には、なほ、種々の花ありて、その形、蠅の如く、蜂の如く、或は、また、蜘蛛の如きものもあり。

蟲の、花を愛することの強きは、よく、人の知れることにて、その蔭に止り、花瓣の中に入り、時としては、終日、立ちも去らで、戯れつゝあるは、われらの、日常、目撃することなり。

蟲類のかくまで、花を慕ふは、抑も、いかなる故なるべきか。その色の美しく、その香のゆかしきことも、一の原因なるべけれど、その重なる理由は、主として、花の中の蜜にあるなり。蜜は、蟲類に取りては、缺くべからざる、唯一の滋養分なり。彼等は、この蜜を吸はむが爲に、絶えず、花のかげを追ひめぐるなり。

花の、蟲類にわけける、その愛、實に、至れり盡せりといふべし。美しき色を以て、これを誘ひ、ゆかしき香を以て、これを招き、更に、これに與ふるに、甘味の蜜を以てす。時としては、また、その色の類似したるによりて、蟲

類をして、たのが陰に隠れて、敵の襲撃を免れしむることさへあり。

さるにても、蟲類は、いかにして、このなさけ深き花の恩に報ぜむとするか。我等は、こゝに、興味ある現象の伏在せるものあるを見て、深く、造化の妙技に感歎するものなり。

抑も、花は、實を結ぶための機關にして、その花瓣の中には、雄蕊と雌蕊とありて、雄蕊の上部に附著せる花粉、成熟して、雌蕊に觸るゝ時は、こゝに、一の作用起りて、果實の生ずるものなり。かくて、同じ花瓣の中に

ある雄蕊の花粉を受くる時は、その實小く、他の花なる雄蕊の花粉を受くる時は、その實大にして、充分に成熟するものなれば、勢、他の花粉を埃たざるべからず。さらば、他の花粉が、いかにして、接觸するかといふに、そよ吹く風の、その媒介をなすことも無きにはあらねど、多くは、彼の蟲類の媒介に依るものにて、これ、即ち、蟲の、花に報ずる道なり。

蜂の、蜜を蓄ふるに、熱心なることは、古來、幾多の話を、東西の歴史に遺せり。胡蝶の、花に戯るゝ狂態、また、幾度も、詩人の口に上れり。されど、これらの蟲類と

花との、密接なる關係に至りては、世人の注意を惹くことなくして、近世に至れり。

さて、この兩者の關係は、かくの如し。まことに、有機界にわけける、注意すべく、味ふべき、肝要なる現象ならずや。

七、生活

人間、わづか、五十年、長くとも、七十八十を超えじ。天地の、幾久しきに較ぶれば、まことに、はかなきものなれども、生まれしからには、その生命を繋ぎざるべか

らず。生活は、實に、人間にとりての大事なり。生活せむには、活かざるを得ず。

「額に汗して食ふ」とは、われわれの、須臾も、忘るべからざる教にして、苟も、この世に居て、衣食する限は、その衣食だけの勞を執るは、當然のことなりとす。勿論、人間には、貴賤貧富の差別ありて、貴きもの、富めるものは、生まれながらにして、活かこともなくて、飽くまで食ひ、暖に衣て、面白く、暮し得れども、これも、また、先祖が活きたる結果なれば、あへて、羨むべからず。

また、富貴の家の子のうへに就いていはむに、祖先

傳來の遺産は、たゞ、偶然なる僥倖のみ。生まれて、父母に養はれて、相當の教育を受け、漸く、成年に達すれば、正に、その保護を辭して、獨立自活すべき時節なれば、逸居して、徒に、衣食する道理はあるべからず。然るに、とかく、心身の勞苦を避けて、日一日を送るもの多し。これを喩ふれば、豚の兒が、既に、成長したる時、能く、駆け廻り、尋常一樣の物をだに求めて食へば、不自由なき筈なるに、動もすれば、母の後につき纏うて、乳を貪らむとする狀に異らず。人にして、豚兒に等しきは、愧づべきにあらずや。

されば、天下の人の子よ、人は、五體のみにて、生まれ
來れるものと覺悟して、自身獨立の志を立つべきな
り。農夫として活け。職工として活け。或は、商人として、
或は、官吏として活け。或は、醫師、辯護士として活き、或
は、學者として活け。たゞ、わのれの才の適するところ
をはかりて、職業の貴賤上下を問ふべきにあらざる
なり。(福澤論吉著福澤全集)

八、智慧の使用につきて

「智慧は小出こだしにすべし」とは、古人の金言なり。大なる

智慧を、一時に現して、一時に、天下を驚さむとするよ
りも、物に觸れ、事にあたり、すこしづつ、滯なく、出して、
世を渡るべきなり。鼠捕る猫は、爪を懸すといふは、よ
ろしけれども、生涯懸して、鼠を捕らざば、爪なきにひ
としからむ。世間の青年輩が、動もすれば、英雄豪傑を
氣取りて、人事に頓著せず、愚鈍といはるゝも、迂濶と
評せらるゝも、一切、かまはずして、高く、みづから構へ、
この事は、わが持前にあらず、その業は、わのが目的に
あらずとて、すききらひする、その有様は、病身なる殿
様が、飲食物を選ぶに似たり。蓋し、青年輩は、胸中に、智

慧の大なるものを藏めて、容易に、これを用ゐず、用ゐれば、則ち、大に、用ゐて、大に、事を爲すべしとの考なるべけれども、如何せむ、事は來りて、人を求めず、我より進みて、事を求むるにあらずば、遂に、これに逢ふことなからむ。鼠を捕らむと欲せば、猫より進むべし。鼠の來りて、猫に觸れたる例を聞かねばなり。雷に、鼠のみならず、蜻蛉にても、蟬にても、目に觸れむには、飛び掛りて、平生の腕前を見すべきなり。

むかし、豊太閤が、木下藤吉の時より、次第に、立身したるは、さる大智をもちながら、はじめは、草履取、つぎ

は、炭薪奉行、また、つぎは、普請奉行と、次第次第に、その智慧を、小出こでにして、かひがひしく、事を辦じ、漸くにして、大名に立身すれば、大名たるべき智慧をいだし、遂に、天下を取れば、天下を平ぐべき智慧をいだしたりき。もしも、當時の木下藤吉が、武家奉公の初より、英雄豪傑を氣取りて、草履取は、わが持前にあらず、炭薪奉行は、わのが目的にあらずといはむには、遂に、天下も、手に入らざりしならむ。太閤一生の大業は、智慧の小出こでに成りしものといふべきなり。(福澤諭吉著福翁百話)

九、植物問答（藤村詩集）

梅は酸くして、	梅の樹の、
葉かげに青き、	玉をなし、
柿あまくして、	柿の樹の、
梢にあかき、	玉なすを、
君は酸からず、	あまからず、
からきはいかに、	唐がらし。
こたへていはく、	われとても、
柿のあまきを、	知れるなり、
梅のすきをも、	知れるなり、

たゞいかにせむ、	ひとのうへ、
我はつたなき、	ものなれば、
生まれながらに、	辛きなり。
ふたつの味を、	ひとつ身に、
兼ねべき世とも、	見えざれば、
のたまふ酸きと、	甘きとは、
梅と柿とに、	まかせねき、
我はひとつを、	たのしみて、
せめて辛きを、	守りたのまむ。

一〇、友人にわくる書

久しく、御出席なきは、御病氣のためとのみ思ひ居りしに、聞くところによれば、つまりぬ閑遊に、その日を送らせられ候ふ趣、如何なる御考かは存ぜねど、平素、思慮深き兄にも似合しからざることに考へられ候ふ。今更、申すまでもなきことながら、青年は、人生の春に候へば、この折に、その培養を怠らむには、美しき果實を收めむことは、到底、覺束なきことに候はずや。然るに、身を、學籍に列ね居る兄が、盛に、培養すべき春を、よそにして、いはば、人生の冬に、爐邊の閑遊とも云

ふべき、圍碁などに耽り居らるゝは、決して、策の得たるものには候ふまじ。この邊、篤と、御考をほしの上、學校へも御いでなされ、餘暇を以て、閑遊を試み給ひては、いかがに候ふらむ。ゆきてかへらぬは、光陰、先に立たぬは後悔とも申せば、思ひちがへなきやう、偏に、祈り上げ候ふ。一片の友情もだし難くて、申し進じ候ふことなれば、失禮の字句は、幾重にも、御見ゆるし下されたく候ふ。(三餘雜錄)

一一、功臣の末路

維新の功臣の中にて、その最なるものは誰なるかと問はば、幼童も猶西郷隆盛なりと答へむ。隆盛は、まことに豪傑の士なり。陸軍大將兼參議たりしが、かの征韓論の行はれざるがために、職を辭し、遂に、鹿兒嶋にかへれり。こゝに、世の人、こは、たゞごとにはあらず、必ずや、大事れこらむと騒ぎあへり。佐賀の亂、熊本の亂、秋月の亂、皆、この隆盛を頼みて、起れるなり。されど、隆盛は、更に、顧みず、ひとり、私學校に學生を集め、武を練り、兵を磨きて、徐に、時の到らむを待てり。

政府は、鹿兒嶋なる隆盛の舉動の、たゞならぬを知

り、かしこなる砲兵屬廠、及び、造船所の彈藥、器械を、大阪へ移さむと試みたり。こは、これ、明治九年の暮つ方なりしが、あくる年の一月三十日、私學校黨、砲兵屬廠、造船所の彈藥、器械を掠め、また、郵便汽船をねしとゞめて、兵を擧ぐべき準備をなせり。たまたま、警視廳の警部中原某等二十一人、鹿兒嶋に歸省せり。隆盛等、そを、問者なりとし、大に、政府に質すところあらむとて、兵一萬五千を率ゐ、二月十五日、鹿兒嶋を出で立つ。縣令大山綱良、官金を出して、その軍資に充てたり。

この時、天皇陛下は、西京にねはせしが、鹿兒嶋、何と

なく、ただやかならぬ由をきこし召して、大御心を痛めさせ給ふこと、一方ならず。やがて、海軍大輔河村純義、内務少輔林友幸を遣して、そのありさまをたゞしめ給ふ。純義等、彼處に至り、大山綱良にあひて、種々、諭すところありしが、聽かず。かつ、暴徒、兵器を攜へて、その艦にせまるなど、謀反のさま、明なりしかば、直に、歸りきて、その旨を奏す。こゝに、有栖川熾仁親王を、征討總督とし、陸軍中將山縣有朋、海軍中將河村純義を、參軍とし、野津鎮雄、山田顯義、曾我祐準、三浦梧樓、大山巖、三好重臣の各少將、及び、大警視川路利良、陸軍大佐

高島鞞之助等をして、各旅團の兵を率ゐ、二月二十日、東京を出て立たしむ。

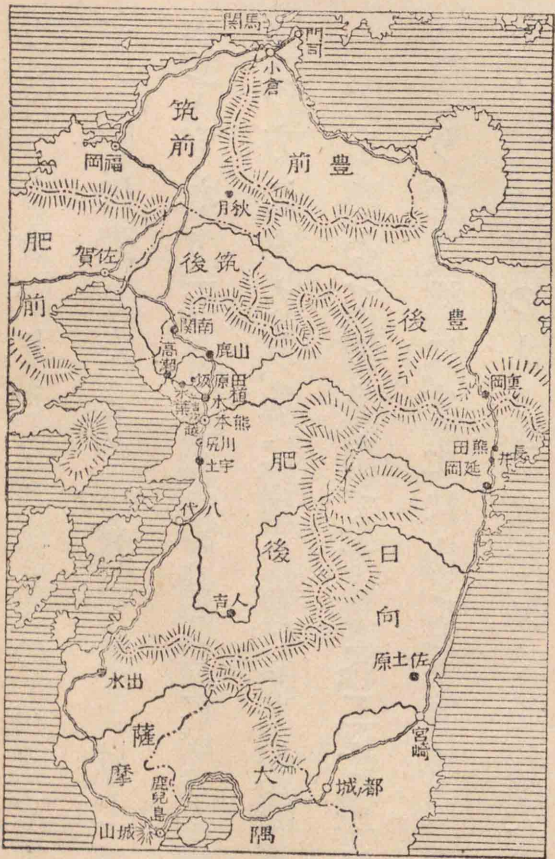
この時、熊本鎮臺の司令長官は、陸軍少將谷干城なり。賊軍、熊本をよぎりて、東の方へ上るときこえしかば、ところどころに、兵を遣して、その備をなす。二十一日、熊本鎮臺の兵、川尻にて、賊にあひ、こゝに、はじめて、戦を開きたり。賊軍、たゞちに、熊本城に迫り、四方より、烈しく攻む。城兵、よく戦ふ。されど、他に、援兵もなかりしかば、遂に、重圍の中に陥れり。

二十四日、征討總督の宮、大阪を出て立たせ給ふ。二

十六日、本營を、福岡に置き、進みて、熊本城を援はむとす。賊、これを、植木、木葉のところどころに迎へて戦ふ。官軍、利あらず。さらに、兵を増して、南關、または、高瀬川に戦ひしが、賊、遂に、引き退きぬ。官軍、勢を得て、田原坂を攻む。賊軍、よく戦ひ、兩軍の死屍、山の如し。三月三日、官軍、吉次越より進み、賊將篠原國幹を斃す。されど、賊軍、少しも、屈せず、かたく、田原坂を守りて、退かず。

陸軍中將黒田清隆、柳原前光と共に、勅を承りて、薩摩に下り、鳥津久光を諭し、大山綱良を捕ふ。歸途、清隆は、征討參軍となり、肥後の八代より上陸して、賊の後

を衝きしかば、賊は、前後より、兵を受けて、逃げまよふ。こゝに、田原坂、植木、山鹿、みな、官軍の手に歸せり。



をさして進む。この時、熊本城のありさまは、いかに。賊

山田顯義、川路利良等、黒田清隆と、兵を合はせて、熊本城を、すくはむと、八代より、北

にかこまるゝ事、五旬糧食つき、彈丸盡きて、また、すべ
きやうもなかりき。なみなみの人々ならむには、出で
ても、賊に降りたらむを、谷干城をはじめ、將士、皆、死を
以て守れり。三月も過ぎて、四月になりぬ。その八日、宇
土の方にあたり、遙に、砲の音せしが、陸軍少佐奥保鞏、
一隊を率ゐて、城を出で、十重に、二十重に、圍める賊軍
をきりぬき、遂に、宇土に出でて、官軍に合す。こゝには、
じめて、城中のありさまを聞くを得たり。陸軍中佐山
川浩、一隊を率ゐ、こはまた、外部より、賊軍の中をきり
ぬきて、遂に、熊本城に入りぬ。こゝには、はじめて、連絡を

通ずるを得たり。官軍、益、振ひ、賊軍、愈、衰ふ。熊本の賊、う
ち破られ、日向と鹿兒嶋とをさして、引きあげぬ。人吉、
重岡、出水、都城、佐土原、延岡など、日々、戦争絶えず。薩、肥、
日、隅、豊の山野、砲聲の聞えざるところもなし。

七月二十四日、官軍、都城を取り、ついで、佐土原、延岡
の諸城を陥れぬ。この時や、賊の將士、多く、討たれたれ
ど、猶、萬人に下らず。賊將、桐野利秋、別府新助、村田新八
等、それを纏めて、長井、熊田などの各地を保ちて、よく戦
ふ。八月十八日、官軍大舉、四方より、賊軍を圍む。隆盛、利
秋、夜のまぎれに、急に、官軍の陣を衝く。官軍、支へ得ざ

る程に、彼は、早くも、圍を破りて、西に走りぬ。官軍、追ひ討ちたれども及ばず、賊、遂に、鹿兒嶋に入りぬ。

かくて、城山にたて籠り、皆、死を決して、官軍の攻め入るを待てり。官軍、急に、討たば、將士を失ふこと多からむと、只、四方を圍みて、迫らず。かくすること、十日あまり、九月二十四日、夜の明け離るゝ頃、大舉して、進み討ちしに、隆盛をはじめ、利秋、新八、みな、自殺せり。あはれ、維新の功臣、遂に、城山松の下露と消えぬ。自ら、招きたる事とはいへ、また、一滴の涙なきを得ざるなり。

一二、初度の歐洲行

文久年間、徳川幕府は、竹内下野守、松平石見守、京極能登守三人をば、特命全權公使に任じ、歐洲なる條約諸國に赴きて、聘問の禮を修めしめたり。余も、亦、幸にして、その員末に列することを得たるが、これ、まことに、われらが、初度の歐洲行なりしなり。

一行の乗船は、特に、英國より派遣せられたる軍艦と定めけるが、英國公使よりは、屢、使を以て、なるべく、一行の人數を減じ、その攜帶の荷物をも、節略せらるべし」と、注意せられけり。されど、何事につけても、格式

といふこと、やかましかりし當時の事なれば、この注意は、なかなか、採用せらるべくもあらず。非常の減員をなしたりといふ一行は、なほ、三十人にあまれり。殊に、その荷物に至りては、將軍家より、各國の帝王宰相に宛てられたる贈品、一行の攜帶品等、積みて、山を作せり。また、その出發の支度につきては、全く、歐洲の事情を知らざりし當時の事として、後日の笑話となりしもの、少からず。

まづ、駕籠、持槍、甲冑、挾箱の類は、非常なる英斷にて、持參に及ばずと決したれど、猶、三使には、その用意無

くてはとて、手槍、及び、鞍、鐙の類をば持參せられたり。それより、筆墨紙はいふに及ばず、白米、醬油、香の物の類に至るまで、悉く、これを用意したり。さて、味噌は、腐敗し易きものなれば、通常の品にては、物の用にも立つべからず、いかがすべきかとの事にて、評議、まぢまぢちなりしが、我等は、切に、その、無用なるべきを説きたれど、「勤向き以外の儀に、さして口は、一切、相成らず」と、一言の下に、叱り付けられたり。さては、いかに、成り行くべきかと見てあれば、ある軍學者の説とかにて、甲斐の信玄が、軍用として傳へたる、萬年味噌の秘傳な

りといふ法に従ひて、俄に製造せらるゝ事となれり。かくて、それをば、瓶數箇に詰めて、持参したりけるが、笑止や、さすがの萬年味噌も、熱帶の温氣には敵し難く、香港と新嘉坡との間にて、はやくも、腐敗して、その異臭堪へ難く、遂に、空しく、海中に投げ棄てぬ。

次に、また、をかしかりしは、草鞋の詮議なりき。諸國遍歴の長途に、到る處、必ず、鐵道あり、馬車ありて、われらの便に供せらるべしとは信じがたし。たとへば、山岳原野の、崎嶇渺茫たる、車も通はざるとき境に至らば、いかにすべき。よしや、三使の乗馬のみは、尋ね得

とせむも、一行三十餘人の乗馬は、いかに、西洋なればとて、到底、これを得べき道はあらざるべし。さる場合に當りて、第一に、無くてかなはぬものは、履物の用意なり。假にも、西洋の靴など用ゐむは、この上もなき、神州の恥辱なりとて、専ら、草鞋の用意に取りかゝりしが、これも、ある軍學者の説とかにて、甲州流の軍用茗荷草鞋といふものを、千足ばかり造られたり。もとより、船中にては、その用をければとて、まづ、郵船に託して、佛國のマルセイユに廻送し置きたりけるが、到著の後、一足も用ゐずして、空しく、同所に留め置き、歸路

に及びて、その取棄を、佛國の接待官に依頼して、別れたりき。

かくて、一行は、文久元年十二月を以て、いよいよ、品川沖より、英國の軍艦に乗り込みたり。まづ、長崎に立ち寄りて、石炭を積み入れ、同二年正月元日の曉に、長崎を出帆して、香港へと向ひぬ。英國軍艦にては、特別の注意を以て、一行を待遇し、荐に、その便利を圖りくられたれど、飲食よりはじめて、衣服、坐臥に至るまで、全く、その風尚を異にせるを、いかにかせむ。船長、士官等は、日本使節の、いかにも、不作法にして、少しも、規律な

きに困じて、その、少しく、規律を守らむことを望み、一行は、また、船長、士官等が、瑣細の事までの干渉を厭ひて、甚しき壓制なりと叫び、互に、その主張を固守して、彼我の意志、すこしも、疏通せざりければ、その間に立ちたる、われら通辯、翻譯係のものは、たゞ、その奔命に疲るゝのみなりき。

さて、一行は、香港より、諸所に寄港し、スエズを過ぎて、まづ、佛國に著し、次いで、英國に渡り、かくて、順次、歐洲諸國を遊歴し、諸國の案内に應じて、歐洲文明の事物を看盡したれども、一行中の二三人を除く外は、別

に、益することもなかりしが如し。汽車中の失敗、宴席上の疎忽、今より、追想するも、ひとり、打ち笑まるゝ事のみ多かり。(福地源一郎著懷往事歴)

一三、水浴

「すこやかなる精神は、すこやかなる身體に宿ると、歌ひし羅馬の國民は、今より、二千數百年の以前に於いて、盛に、水浴を行ひき。歴史の記載するところによれば、チベル河の流に入りて、塵垢を洗ひ、游泳の技をも練習せしこと、明なり。今も、われらが、繪畫、彫刻など

にて見る、彼等の軀幹の偉大なると、筋肉の、鐵石の如きとは、蓋し、偶然にあらざらむ。

我が國民が、古來、清きを好む性ありて、沐浴を怠らざるは喜ぶべし。彼の西洋各國に見る如き、惡性の皮膚病すくなく、又、その種類の少きことは、これがためなりとは、醫家の、齊しく、いふところなり。

沐浴に、種類多し。溫度を以ていへば、冷水浴、溫水浴、湯浴と分つべく、成分を以てすれば、淡水、礦泉、海水と數ふべし。湯浴の溫度は、度を過すべからず。人の體溫は、三十七度内外なれば、大かた、それより、高かるべか

らず、低かるべからず。

冷水浴は、神経の末端を刺戟して、抵抗力を増さしむ。されど、刺戟の強きに過ぐるものなれば、虚弱なる人には勧めがたし。さる人は、夏の頃より、毎朝、手拭を冷水に浸し、それを絞り、これにて、摩擦するを善しとす。そのはじめにありては、煩しきを訴ふらめど、常習とならば、なほ、鹽嗽の廢し難きが如きに至らむ。

古來、温泉の賞美せられしは、我が國にても、道後温泉の發見が、遠く、上代にありしにても知られなむ。これに反して、海水浴の行はるゝに至りしは、輓近の事

なり。

游泳を知るものは、激浪に乗りて、身體の運動を營むが故に、尋常の浴以外に、特種の效あり。游泳を知らざるものといへども、遠淺に立ちて、小波の柔なる撫摩にあふ時は、海氣の刺戟と相俟ちて、皮膚の神経を強くする效あり。

海水浴場として、最も、適する地は、南に、海を控へ、北に、山を負へるところとす。そは、四時、季候の劇變なきを以てなり。海は、荒海は、浪、強くして、危険なり。礫石多き處は、入るに堪へず。

入水の時間は、人の體質により、又、天候により、一定し難けれども、不快を感じずるまでに及ぶはわろし。度数も、朝夕の二度をよしとす。かの日中、海に飛び入り、又、熱砂を踏むが如きは、始めて、海を見る人などには、勧め難し。單に、海濱の生活のみにては、效あるべければ、さる事は、強ひて、行ふにも及ばざらむ。

海水浴の、效あるは、浴、そのものが、效あるのみならず、周圍の地勢が、無限の保養を與ふるを以てなり。見よ、紅塵萬丈の中に、叢を眺めし眼は、忽ち、地平線上の帆を數ふるにいたり、オゾンに富みたる海氣の呼吸

は、胸廓の、一志ほ、増大せるかを疑はしむ。浪に追はれて、貝を拾はむか、嶋山を望みて、歌を詠まむか、木のづから、胸襟の、爽快なるを覺えむ。思へば、誰も、都門の塵を避けて、松風濤聲、相和するあたりに、夏の日を送らむこと、望ましき限にあらずや。

一四、太氣中の水分

かの雲といひ、雨といひ、或は、霧、或は、雪といひて、天氣に、種々の變化を起すものは、悉く、これ、太氣中なる水の、まわぎに、外ならず。

さらば、水は、如何にして、太氣中に含まるゝかといふに、それは、海洋、河川、湖澤の面、及び、地上より、熱の爲に蒸發せらるゝなり。外に、われわれ、人類や、他の動植物やの呼吸作用によるものもあり。

水分を含める太氣の溫度、漸く、冷え行けば、遂に、凝りて、復、水滴となり、再び、我々の眼に觸るゝに至る。

一天雲無く、微風、そよそよと、吹く夜、地熱、速に、散じて、氣溫より冷なる時は、これに接する太氣中の水分は、忽ち、凝りて、草木の葉には、珠を飾り、大地には、玉を布く。これ、露なり。氣溫晝夜の差、大なる秋に、最も多く、

春に多く、冬、これに次ぐ。霜は、即ち、この、冰れるものにして、初春、又は、晩秋の夜間の、氣溫冰點以下に降る頃に零る。霜害を防ぐには、まづ、大地の冷ゆるを防ぐべし。田舎などを行かば、落葉を焚き捨てたる烟雲の、處々に、騰れるを見む。これ、わのづからなる避霜法といふべし。

凝結したる水滴、太氣中にとゞまり難き重さに達する時は、遂に、地上に降下し來る。或時は、濃にして、膏の如く、或時は、細くして、絲の如く、或時は、疎くして、銀繩を垂れたる如く、或時は、沛然として、盆を傾くるが

如し。これ、雨なり。その凝結の際の溫度、冰點以下なる時は、鷲毛を零し、玉屑を飜して、世界を銀に化す。これ、雪なり。雪の、溫き太氣中を過ぎたる爲、一部融けかゝりたるものを、霰といふ。霰は、雨の、卒に、冰りたるものにて、その際に生じたる無數の小孔の爲に、不透明體となれるなり。

霧と雲とは異なることなく、只、地上に近きものを霧と稱するのみ。その濃厚なるものは、まゝ、雨と見分け難し。要するに、微細なる水滴の、太氣中に泛べるものなり。

又、氣中に漂へる細塵は、よくその周圍に、水滴を凝結せしむ。都市の近傍には、常に、地平線上に、霞を見るは、即ち、この細塵の作用によれるなり。(博物叢話)

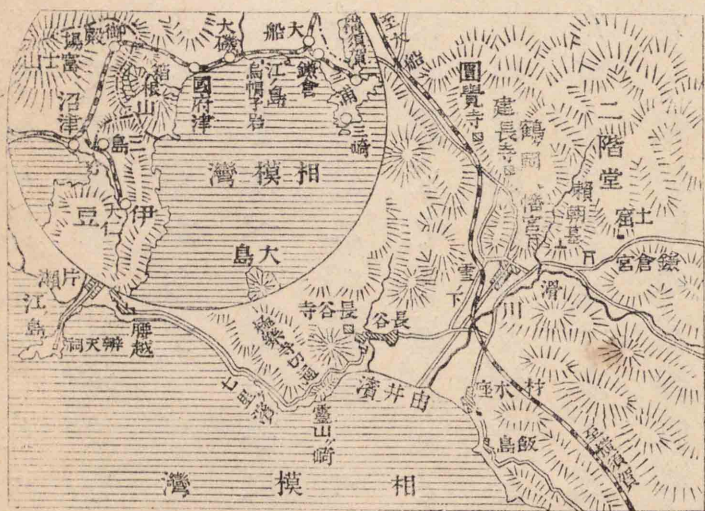
一五、江の嶋鎌倉

今年も、鎌倉に遊ぶこと、二十日になりぬ。明暮、友となりたる波の聲、山の姿、砂の色、貝の光、忘れむとしても忘られず。

宿とする處は、長谷寺の山の前、居ながらにして、鎌倉の海を、一目に、望むべく、右には、靈山が崎、まぢかく

峙ち、左には、材木座、飯島の人家、波ごしに、由井の松原
 を隔てて、たゞ、手にとる如く、見渡され、遠くは、三浦三
 崎の山々まで、呼べば應へむとす。南の方には、伊豆の
 大嶋さへ、晴れたる日には、煙を見せて横れる、恰も、鯨
 の汐噴くに似たり。

朝、疾く、起きて、渚に出づれば、貝はうち寄せられて、
 砂の上にある。薄紅にて、花の如きもの、眞白にして、鳥
 の如きもの、帆立貝めきたるもの、月日貝らしきもの
 など、濡れたる色のうつくしさよ。子供は走り寄りて、
 拾はむとするに、波は來りて、拾はせじと争ふ。



磯に翻る赤旗は、海の荒るゝを告げ、青旗は、和ぎた

るを知らするなり。今日も、
 青旗なりと喜ぶ子供は、潮
 浴びむとなるべし。朝食の
 煙、こゝかしこに、騰りて、日
 影は、やうやく、わが許に來
 りぬ。白布の筒袖、麥藁の帽
 子、物の具はよし、いざ、波と、
 今日も戦はむ。
 戦ひ疲れては、磯にあが

りて、砂に臥し、砂に坐す、また、たのし。子供は、工兵となりて、山を築けば、波、また、大擧し來りて、一打に、奪ひ去るもにくからず。

板を浮べて、雙の手に持てるは、泳がむとする人、手をひき連れて、舞蹈しつゝあるは、波を飛び超す人、世に、物思なしとは、かゝる境界にやあらむ。

更に、山に登り、畑を分くれば、一寸の地も、歴史をもたざるはなく、一本の樹木も、英雄の形見ならざるはなし。鶴が岡の八幡宮、殊に、昔志のばるゝところなり。銀杏の梢、まづ、目につく。二階堂なる鎌倉宮、土窟の哀

には、涙に咽ばぬものなかるべし。頼朝の墓、蔦葛這ひかゝりて、いかめしかりし、その代の名残も見えず。何ならぬ古寺、名もなき古塚、皆、これ、涙の種なり。

一日、江の島に行く。極樂寺の切通より、七里が濱にかゝるに、雪と碎け、霧と散る波、たなじ相模の海とはいへど、興、更に、ふかし。をりをり、波に追はれて、砂路を、遠く、逃げ狂ふ。見よ、あれに浮びたるが、江の嶋なりなど、指し語るに、小さく、見えたる嶋の鳥居は、目の前にせまり來ぬ。

社後の岩屋に下りむとする崖上に、茶屋あり。人々、

腰うちかけて、ラムネを抜かせ、蝶螺を焼かせなぞす。下の方は、峻しき岩屋道にて、もぐりどもの身をさかさまにして、波に入るも見ゆ。烏帽子岩を、なかにして、右は、大磯より箱根のあたり、左は、三崎の鼻より大嶋まで、霞みながらに、指さるゝもれもしろし。沖の片帆に残りたる夕日、いつしか、影を收めて、雲を染めたり。雲間に聳え立てる富士は、忽ち紅に、忽ち紫に、忽ち黒く、忽ち薄く、遂に、姿を隠しぬ。三日月、高く、岩根の松に懸れり。(大和田建樹著雪月花)

一六、遠足 (大和田建樹)

一

ながるゝ水は太鼓の聲、

松ふくかぜは唱歌の聲、

旅立つあしたの心の愉快さ、

いざ越せあの山、

いざ踏めその露。

二

ひとむら茂るはやしの奥、

やしろか寺か道あるかた、

日影はかすめり小鳥は歌へり、

すゝめやわが友。

古蹟をたづねて、

三

みどりの山は過ぎ來しあと、

はてなき海は今行くさき、

自然を友なる旅路のたのしさ、

いざ呼べあの舟、

いざ切れあの波。

一七、 少年時代の苦學

私の少年の時分は、世間一般に、遊惰で、姑息で、時勢が、どうなるか、氣運が、どうかはるか、更に、頓著せぬやうな有様であつた。ところが、私の藩に、多田立德といふ人があつて、漢學の出來るうへに、時勢を觀ることが鋭く、さうして、世間の交際も廣く、はやく、長崎に往つて、高島秋帆に、西洋の砲術などを學んで來た人である。その人の話を、私が、十四五歳ごろから、聽いて居つたが、聽けば聽くほど、世の中の事が案じられて、ならぬ。どうしても、遊惰な、姑息な、寢入つて居るやうな

世間を、はやく、警醒せねばならぬといふ考が起つてきた。

私が、志を決して、江戸に出て来たのは、十七歳の時で、その江戸に出て来た理由は、今までの様な、日本流の兵學をやつたり、砲術をやつて居るやうなことではいかぬ。江戸には、いろいろの先生のあるは勿論、西洋の兵學、砲術も、大に、開けて居るといふことであるから、それを學ばうといふのであつた。果せるかな、江戸に来て、江戸の有様を見ると、日本の兵學、砲術では、駄目だといふことで、誰も誰も、西洋の兵學、砲術の事

ばかりいうて居る。そこで、彼の有名な佐久間象山先生のところに入門して、西洋の兵學、砲術を學びかけて見た。ところが、國でやつて居つたやうなものではない。江戸は、江戸だけあつて、物事が、皆、生き生きして居つて、日々、學んで行く事が、珍しくて、珍しくて、たまらなかつた。

その後、都合あつて、一寸、國へ歸つたが、程なく、出て来て聞けば、先生は、幕府から、嫌疑を受けて、信濃の、自分の藩に幽閉せられたといふ事であつたが、その時の残念さは、實に、いふべからざるものであつた。それ

ばとて、どうする事も出来ぬ。やむを得ず、他に、いろいろな先生を便つて、話を聽いたり、説を叩いたりして居たが、そのうちに、西洋の兵學、砲術をやるには、西洋の書物を讀まなければならぬ、翻譯書を讀んで居たのでは、とても、埒があかぬといふことを考へた。かつ、この時は、亞米利加の使節が、浦賀に來た、少し後のこととて、西洋の兵學、砲術をやらねばならぬといふ事が、一般に、解つて來て、その學問が、急に、開けて來たから、私も、それを研究することに志した。さて、その時分の西洋學は、専ら、蘭學ばかりであつて、今日のやうに、英學、

獨逸學、佛蘭西學といふやうなものを學ぶことが出來なかつた。そこで、その蘭學を學ぶには、誰に學ぶべきかといふに、大抵、醫者に學ぶのである。それは、醫術といふものが、早く、開けて居つたものだから、蘭書を讀む人といふものは、主に、醫者である。それ故に、何人も、西洋の學問をするには、醫者の世話にならなくてはならぬといふ有様であつた。

私が、佐久間先生に就いて居たのは、ほんの、二年ばかりに過ぎぬけれども、少しでも、先生の薰陶を受けて居るから、益、原書を讀んで、西洋の事情を知りたい

と思ふ心が盛になつて來て、それからは晝夜兼行で、力の及ぶだけ勉強した。勉強というても、今の勉強の仕方とは、大に、その趣が變つて居た。今日は、小學から大學まで、學校に往つて、勉強だにすれば、段々に、進んでゆくことが出来るのであるけれども、その時分は、洋學をやる學校といふものはない。唯、蘭學の出来る先生が、自分の私塾で、二十人か、三十人かの書生を教ふるといふに過ぎぬ。それも、廣い江戸の中に、五六箇所位しかなかつた。ことに、困つたのは、書物である。書物がすくない上に、價が、非常に、高い。その頃の書生と

いふものは、とても、本を買ふといふやうな事が出来ぬ。そこで、皆が寫したのである。一冊の原書があると、それを、十人も、二十人も、三十人も、人が寫す。寫して、それを習ふといふ有様で、餘程、志の強い人か、又は、才が、十分、利いて居る人でなければ、業を遂ぐる事が出来なかつた。

私が、六七年間、熱心に、學問して居る中に、幕府が、西洋風の學校を立てた。その學校は、蕃書取調所というたが、後には、開成所と改めた。それが、西洋風の學校の出來たはじめてであつて、その時は、私は、二十五歳の時

であつたが、その學校の教師の末席に加へられた。學校には、政府の力で買つたのであるから、大分、書物が多かつた故、それを借りて讀んだが、段々、讀んで居る中に、蘭學ばかりではいかぬといふ事がわかつて來た。それから、私は、獨逸學を學ばうといふことに志した。然るに、當時、獨逸學をするものとしては、私の外に、同志の者二三人あるだけで、他に、教ふる人も、習ふ人もない。纔に、和蘭語で對譯してある本で讀みはじめたが、餘程、苦しかつた。さて、それまでは、兵學をやるつもりであつたけれども、攘夷論の盛な時であつて、その方

は、やる人も多くなつたから、それよりはと思つて、法律だの、政治だの、哲學だの、道德學だのの書物を讀むことに志した。

考へて見ると、最初、志を立てたのは、多田立德といふ人の獎勵によつたこと、次に、各國の書を讀む志を起したのは、佐久間先生の獎勵によつたことで、この二人、特に、佐久間先生の恩は、忘れようと思つても、忘るゝことが出來ぬ。(加藤弘之談話筆記)

一八、學問の活用

れよそ、學問の要は、活用に在り。書生もし、學んで、活用すること知らざれば、萬卷の書も、身を益し、世を益することなからむ。つまり、生字引となりて、終るに過ぎざらむ。

昔、ある書生、江戸に修業に出でて、それぞれの學流に就き、諸大家の説を寫し取り、日夜、怠らずして、數年の間に、その寫本數百卷を成し、もはや、學問も成就したるが故に、故郷へ歸るべしとて、自身は、東海道を下り、寫本は、葛籠に納めて、船積にして、送りけるが、不幸なるかな、遠州沖にて、その船、難破に及びぬ。この災難

によつて、かの書生、その身は歸國したれども、學問は、悉皆、海に流れて、何一つ、心身に附きたるものもなければ、その愚さは、正しく、前日に異なることなかりきといふ話あり。

今の書生にも、亦、この掛念なきにあらず。今日、都會の學校に入りて、その講論する様子を見れば、これを評して、學者といはざるを得ず。されども、今、俄に、そのノートブックを取り上げて、これを、田舎に放逐することあらば、親戚朋友に逢ひて、われ等の學問は、東京に遺し置きたりなど、いひ譯する奇談あらむ。

學問の本旨は、只、讀書のみにとゞまるに非ずして、精神の活に在り、その活を實地に施さむには、種々の工夫なかるべからず。まづ、第一に、事物を觀察して、智慧を養ふこと、第二に、事物の道理を推し究めて、これの見識を立つることなり。されど、たゞ、これのみにては、いまだ、學問の活用を悉したりとはいふべからず。素より、書物も讀まざるべからず、はた、著さざるべからず。人に對ひては、談話もせざるべからず。社會に對ひては、意見も吐かざるべからず。即ち、その觀察と、推究と、讀書とは、以て、智見を集め、その談話は、以て、智

見を交換し、その著書と演説とは、以て、智見を散ずる術なり。

人、もし、この三つのものの應用を完うせむか、こゝに始めて、活學者といはるべく、學問を勉強したる人と稱するを得べきなり。然らずんば、その人、いかほど、勉強したりとも、これ、死せる學問ならむのみ。その極や、なきに等し。(福澤諭吉著福澤全集)

一九、トマス、エデソン

エデソンは、近代の、有名なる發明者の一人なり。彼

は、西曆一千八百四十七年を以て、北米合衆國のオハイオ州に生まれたりき。父はもと、和蘭人なるが、夙くより、こゝに來りて、裁縫、園藝等の職を營み、又、穀商をも營めり。性質、まことに、温厚にして、また、頗る、意志の強き人なりしが、如何せむ、家道、常に、意の如くならずして、はかなき生活をのみ送れり。されば、エヂソンは、學校に入學することも協はず、たゞ、纔に、母に従ひて、讀書、算術の初步を學び得たるのみなりき。されど、性、頗る、讀書を好みて、書物といはず、新聞といはず、手元にあるしものは、すべて、根氣よく、これを讀み習ひし

かば、その智識は、次第に、博くなりぬ。

家道、ますます、衰へて、今は、その日の生活にすら、事、缺くやうになりしかば、彼は、みづから、世に出でて、その生活の道を求めざるべからざるに至りぬ。これ、彼の、わづかに、十二歳に達せし時なりき。體格の、強壯なるのみならず、その意志も、父の性をうけて、頗る、強固なるこの少年は、今や、憤然として、みづから、その力を試みむと決心せり。

彼は、ある鐵道のボーイとなりぬ。その事務に、忠實にして、志かも、敏捷なる、はやくも、他の、熟練したる同

僚を凌ぎて、人々の注意を惹くに至れり。かくて、暇ある時は、わが得たる賃銀をば、書物に換へて、熱心に、これを讀誦するを、この上もなき樂とせり。ある時、彼は、ある化學書を買ひ來り、常の如く、熱心に、これを讀めり。されど、その學理は、容易に、解せらるべくもあらず。こゝに、彼は、書中の注意に従ひて、みづから、實驗に訴へむと、さまざまの困難を犯して、あやしげなる實驗室をば、その車中の、わが室内に設けたり。かくて、汽車の進行中は、そこに引き籠りて、その實驗を續けつ。後年、彼が、發明の偉業を大成せし素は、實に、この間に養

はれたるものなりといふ。

企圖の才を具へ、かつ、萬能の知識を具へたる彼は、



そこに、また、一の新計畫をなしぬ。そは、古き活字を買ひ、また、印刷の器械を買ひ來りて、短日月の間に、一新聞を發行したることなり。彼は、一人にして、記者と印

刷者とを兼ね、併せて、その販賣者たりしなり。かくて、その新聞をば、汽車の乗客に賣り、その收入を以て、實

驗室の整頓を圖れり。されど不幸の出來事起りて、彼の苦心は、空しく、水泡に歸せり。ある日、燐の入りたる壘、ふと、柵より落ちて、發火し、その近くにありし荷物に燃え移りぬ。すは、火事よ」と、たち騒ぎしほどに、人々も馳せ來りて、とかくして、揉み消したれば、大事に至らずして止みたれど、これがために、多年の苦心になれる、彼の實驗室は、全く、うち壞されて、その形を止めざるに至れり。

その後、また、新聞の記事に由りて、ある商人の怒を買ひ、ために、その新聞も、遂に、廢刊せり。かくの如く、さ

まざまの不幸は、一時に、彼の身邊に集り來りて、彼の志業も、一時、中絶せむとする傾向を示したりしが、これは、これがために、少しも、撓むことなく、熱心に、その業務を勉勵し、その餘暇を以て、ひたすら、思を、研究に凝したり。

ある日のことなりき。エヂソンは、鐵道の線路の傍に立ち居たるに、その前面に、一人の幼童ありて、線路に上りて、戯れ居るを見たり。危険なりと思ふまもあらせず、かなたよりは、はや、列車の進み來れるありて、その間、僅に、數間に過ぎざりけり。かくと見るや、エヂ

ソンは、奮然、身を躍して、線路のうちに入り、いそぎ、幼童を抱き上げたり。げに、危かりき、列車は、エヂソンの肩を摩りて、過ぎぬ。幼童は、辛うじて、救はれぬ。そは、この驛長の愛子なりけり。驛長の喜、譬ふるに、物なく、彼は、エヂソンを拔擢して、一躍、通信技師となせり。エヂソンの志業は、こゝには、はじめ、その緒に就きぬ。彼は、通信の職にありて、最も、注意して、電信の學理を研究し、その考察を進めたり。

これより、エヂソンの名、漸くたかく、彼は、遂に、ニューヨークの附近にわいて、一大實驗室を設立すること

を得たり。かくて、そこに、種々の發明を大成したり。就中、その蓄音器、活動寫眞鏡の發明、及び、電氣燈の改良等は、最も、著名なるものにして、彼の名聲は、これによりて、全世界に響き渡れり。

二〇、硝子

今の時代を、人は、鐵の世界と呼べり。まことに、家屋といひ、鐵道といひ、橋梁といひ、その他、大小の機械道具、わよそ、物として、鐵が、主要の部分を占めざるは、無き有様なり。然らば、世界は、開闢以來、鐵のみの占領に

歸したりけるか。否々、土器の世界もありき。石器の世界もありき。さては、今日の鐵世界の次に來るべきは、果して、何物の世界なるか。

日に月に、開け行く、今の世界は、遂に、硝子の世界を現出せむとす。家毎に、實用にも、裝飾にも、硝子を用ゐざるはなきを見よ。時計の蓋硝子、寒暖計の管、さては、眼鏡の玉など、もし、硝子なかりせば、何物か、これに代用すべき。げに、外國にては、これを以て、道路敷石の料に供したるもありて、そのもちかたは、花崗石に三倍し、價格は、セメント、石材よりも、廉なりとぞ。更に、この

需用は擴りて、火に焼けず、水に朽ちず、永久、保存の利益ありとて、造家の料にも供せられむとする勢あり。まことに、硝子の世の中なるかな。

かく、需用多き硝子は、如何にして、製せらるゝか。硝子は、鑛物の教科書にわいて、その原料の、珪石と石灰と、炭酸曹達とを混ぜたるものなることを知るならむ。これ等の原料を、よきほどに、こき交ぜ、坩堝を仕掛けたる沸竈わかしがまにて、十五六時間も煮立つれば、水飴状を呈すべし。さて、職工は、長さ四尺程もあらむと思はるる、鐵のパイプを以て、仕事臺の上に、必要の量を取り

出し、一定の模型のなかに吹き込みて、種々の品物を造ること、恰も、飴細工の如し。諸子の知らるゝラムネの瓶なども、皆、この法を以て、製出せらる。その仕上りし物は、冷竈ヒヤカマにて冷すに、薄き物は一晝夜、厚き物は、一週間にして、その質かたまるといふ。

この外、板硝子の製法あれども、こは、いまだ、本邦にて製出せらるゝ運にいたらず、皆、輸入を仰ぐとぞ。

終に臨みて、ビイドロとギヤマンとの區別を言はむ。ビイドロは、葡萄牙語のビイトロの訛、ギヤマンは、和蘭語のデアマンの訛なり。今は、皆、等しく、ガラスと

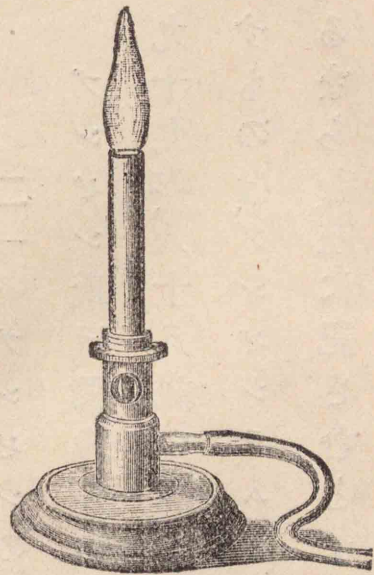
のみ言へど、それも亦、英語の訛りたるものなることは、人の知るところなり。(博物叢話)

二一、ブンゼンの逸事

ブンゼン氏は、獨逸の化學者にして、西曆一千八百九十九年、八十八歳の高齢にて、歿せり。苟も、化學に志すものは、ブンゼンランプによりて、氏の名を記憶するならむ。左に記さむとする、二三の逸事は、ハイデルベルヒの實驗室に在いて、親しく、氏に、教授を受けたる一學士が、倫敦の化學新誌に投書したるものより、

抄録せるなり。

ブンゼン氏の放心は、有名なる事なり。氏は、余が旅宿に鄰れる料理店にきて、晝食するを例とせしが、ある年の春、小牛の肉と、アスパラガスとを命じたるまゝにて、また、食品を改めず。數週間の後、料理人いできて、アスパラガスは、季節はづれとなりて、注文に應ずる能はずと、いふを聞きて、はじめて、日々、同一の



ブンランゼンブ

食事をなし居りしに、心づきたりとか。さて、更に、熟考の上、他の品を命ぜしが、これより、また、日々、同一の食事をなし、余が旅宿を轉ずるまでは、他の品に換へたることを聞かざりけり。

氏が、ハイデルベルヒの實驗室の規約中に、左の箇條あり。

- 一、瓦斯ランプを、徒に、點火し置くべからざる事。
- 二、有害なる瓦斯を發生する時には、必ず、通風室内にわいてする事。
- 三、共有の器機を使用せし後は、必ず、原位置に復

し置くべき事。

四、天秤箱の戸を開放し、或は、秤盤の上に、分銅を置き忘るべからざる事。

右の條を犯すものには、輕重に従ひ、罰金を拂はしめ、その収入金は、實驗室備付の書籍購入の資とすべし。

右に關する事務は、學生中より、役員を選擧して、當らしむる制なりき。彼の學士が、その役員たりし時、特書すべき左の事ありき。

ブンゼン氏は、常に、葉卷煙草を、口にせしが、或時、ブンゼンランプに點火して、煙草をくゆらし、ランプを消す事を忘れて、行きけり。余は、己の任務を果すべき時なりとし、机上に、白墨を以て、先生が、規約第一條を犯したりと、特筆大書せり。翌日、ブンゼン氏、これを見て、笑を含み、規定の科料を拂ひ、余が、任務に、忠實なるを賞せられたり。

ブンゼン氏は、化學實驗の際、藥品爆發のため、負傷せし事、志ば志ばなり。嘗て、カコデル研究の際、一眼の明を失ひ、又、すこし、聾となりしは、事實なり。又、或時、氏は、激烈なる爆發のため、地上に投げ出されて、氣絶せし

が蘇生して、始めて發せし詞は、材料は少しは猶存し居るやと、いふ一言なりきといふ。これ等の事實より、世にブンゼン氏は、一の眼、一の耳、一の肺を失へりといへり。ブンゼン氏の門よりは、多くの有名なる學者をいだせり。

二二、公子の躰方を申し遣す書

餘寒の處、その地の子供等、なにも障なきは、一段の事に候ふ。去る二十七日、餘四磨事、神勢館へ行き候ふ由、これよりは、歩行、又は、乘馬にて、度々、行き候ふが宜

しく候ふ。朝も、未明より起き、水にて、顔を洗ひ、薄著にて、庭などへ出て、子供相應、いたづら致し候ふが宜しく、風を引き申すべしなどとして、用心致さするは、以ての外に候ふ。

とかく、武士の子は、體を、幼年より鍛へて育つるやうに致したく、さて、文武共に、出精致さするが宜しく候ふ。それにて、死ぬほどの子は、惜しからず候へば、死ぬとも苦しからず候ふ。他へ、養子につかはし候ふにも、柔弱にて、文武、これなき者にては、當家の外聞宜しからず候ふ故、附の者にも申し聞け候りて、手荒く仕

立て、文武を勵ませ申すべく候ふ。文武稽古の際は、前文にも申す如く、神勢館又は好文亭等へ、歩行致し、又相手などと、竹刀打致すが宜しく候ふ。子供の、大人の如く致し居り候ふは、身のこなれ悪しく、宜しからず候ふ。

如才は、あるまじく候へども、序にまかせ、申し遣し候ふ。牛乳は、人乳を罷め候ふほどの子供は、たれが用ゐるも宜しく、毎朝、とりたての乳を吞ませ申すべく候ふ。一人にて、五勺か、一合かも吞まば、足り申すべく候ふ。何よりも、牛乳に超す薬は、これなしと存じ候ふ。

なほなほ、餘四磨始め、毎朝の水は、只今にても、浴び居り候ふ事と存じ候ふ。もし、浴び申さず候はば、あぶせ申すべく候ふ。さるかほり、湯はつかはせ申すまじく候ふ。(徳川齊昭)

二三、親不知の濱

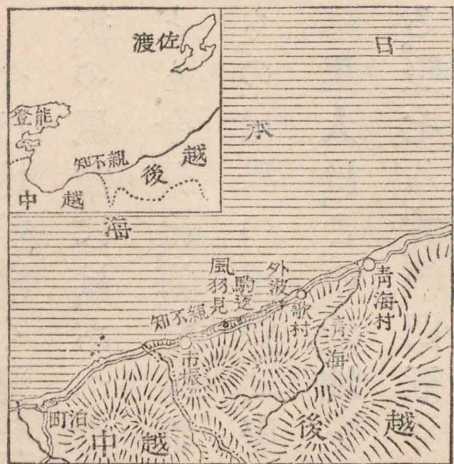
二十一日、雨霽れたれど、波高くして、船出すべからず。乃ち、船を棄てて、陸行と定めつ。十六日ばかりの月残りて、影白き頃、出で立つ。泊町に入れば、海は、一きは、近くなり、路傍の處々に、古松あり。案内者に問へば、こ

れは、加賀の町松とて、昔、加州侯の、六十間毎に、松を植ゑて、旅人の便に供したるものなりといふ。

市振村に著く。奇巖怪石、起伏して、波高く、砂白し。北には、遠く、佐渡が嶋の、黛の如きを望み、近く、白帆の、點々たるを見、風景、太だ、佳なり。これより、北陸第一の難所として、世に、有名なる親不知にかゝる。安全なる新道は、南方の峠に開鑿せられたれば、旅客の、こゝを過ぐるもの、稀なりと聞けど、話の種にもと、物ずきにも出て立てるなり。

右は、壁の如く立てる斷崖、左は、果もなき大海にて、

その間、只、一筋の砂地を残せり。天氣あしく、風烈しき時は、荒浪、直に、斷崖にうち懸けて、動もすれば、旅人の、



命を失はむとすることあり。斷崖の處々に、穴あり。たまたま、通りかゝりたる人は、この穴に走り入りて、波の引きたる間を見料ひて、遁れ出づ。また、波來れば、次の穴に入りて、

これを避く。もし、北風強き時は、數日を経れども通行し難きこと珍しからずとぞ。されば、親は、子を扶け、子

は、親を顧る違なしとて、親不知、子不知の濱とは呼び來りしといふ。

今は、地勢漸く變化したるにや、水際遠くなりて、大抵の風波には、あへて、危きことなくなりぬとぞ。されども、今日は、海や、荒く、潮聲悪しく、我等如き山地のものは、身の毛、いよ豎ちて覺えぬ。

里人は、この砂地を歩むに、板沓といふものを用ゐる。豎七八寸、幅四五寸の板に、緒をすげたるものなり。穿き試みるに、足を、砂中に踏み込む憂なくして、甚だ、便利なり。

風羽見の難を過ぐれば、駒返といふ所あり。斷崖の腰に、岩を穿ちて、道をつけたるが、狭くて、馬も通らねば、兩方の驛より牽き來りて、こゝにて、馬を乗り換へし故に、この名ありといふ。

歌村のはづれよりは、水陸、急に、また、ひらきて、砂汀、いと長し。青海村までは、親不知の濱のうちなり。青海村は、家數三百ばかりありて、近邊より、たほく、石灰を産す。(成蹊隨筆)

二四、アラビア馬その一

アラビアの地は、古來、駿馬の產地として、その名高く、天下の逸物を出して、あまねく、世に珍重せらるゝは、誰もよく知るところなり。

今、つらつら、アラビア馬の、今日ある所以を思ふに、これ、決して、一朝一夕の故にあらず、又、單に、その地味、風候にのみ由れるにもあらで、數千年の久しき、終始、一日の如く、孜々として、倦まざる、土人の丹精によりて、はじめて、こゝに至りしものなり。

アラビア人の、馬を相るや、その理想、頗る高く、その選擇、また、頗る、嚴密なり。苟も、わが理想とするところ

の標準に合はざれば、即ち、以て、わが産地の名を辱むるものとなし、ひたすら、その改良を圖りて、これが爲には、寢食をさへ廢するにいたるといへり。こは、もとより、アラビア人の性情に出でたるにも由るべけれど、その重なる原因は、この國に傳れる一種の神話によれり。

太古、アラビア人の祖先、神にむかひて、乞うていはく、神よ、われに、一の精靈を與へ給へ。その精靈は、以て、われら獨占の名譽となすに足り、萬民の畏敬を受け、諸人に愛敬せられ、また、われらの敵を屈服するに足

るべき資質を具へたるものならざるべからず」と。神は、この請を容れて、一匹の駿馬を下し給へり。かくて、その馬に向ひて、

われは、汝に、世界無比の美質を與へたり。いかなる珍寶と雖も、汝の見むと欲するところのものは、直に、汝の眼中に浮ばむ。汝の蹄は、以て、汝の敵を蹂躪するに足り、汝の肩は、又、以て、汝の親友を負ふに足らむ。全世界の生物中、汝の如く、幸福なるものは、他に、その比類なかるべし。この神話を國々で傳へると、宣ひきとぞ。これ、その神話の梗概にして、アラビア

人の、固く、信ずるところのものなり。

されば、アラビア人は、常に、思へり。馬は、たゞ、アラビア人の手にありてのみ、幸福なるを得べしと。故に、若し、他人の、來りて、馬を求むるものあらむには、彼等は、實に、その身命を賭して、これを争ふなり。ある地方にては、馬を、他國人に賣りたらむものは、律するに、死罪を以てすべしと、いふ法律すらあり。彼等は、また、常に、信ぜり、その國に生まるべき馬は、すべて、駿良無比の性質を具備したるものならざるべからずと。爰を以て、若し、少したりとも、その缺點あらむか、彼等は、直に、

それをわが飼育の道の足らざりし罪なりとなし、これをして、その眞正なる發達をなさしむるにあらずば、祖先に對しては、不孝の子となり、神に對ひては、また、不忠の僕となりて、その罪、決して、逃るべからざるものなりと思へり。

二五、アラビア馬その二

アラビアにては、馬は、常に、家族の一員として、待遇せられ、その家長の、これを思ふ情は、實に、その子弟を思ふ情に、ことならず。馬も、亦、よく、人に馴れて、その家

族と親み、その兩者の關係、看る者をして、そゞろに、欣慕の念を禁ずること能はざらしむといふ。嘗て、一旅行者の、身親しく、アラビアの内地に入りて、牧馬の狀況を觀察したるものありき。その紀行中に、

余は、現に、一匹の牝馬の、幼童と共に、戯れ遊べる様を見しことあり。纔に、歩み得るばかりなる幼童の、牝馬の尾を引き、足を撫でて、これに戯れかゝれるに、馬は、さも、楽しげなるおも、ちして、よく、幼童をいたはり、時に、口と足とを以て、その玩具を捧げつつありき。余は、この一事を見て、アラビア人と、その

馬との關係の決して偶然にあらざるを知れりと記せり。

さて、生まれて十八箇月にして、馬の教育は、こゝに開始せらる。はじめは、少年騎士の手に屬し、縦横に、原野を奔馳するを以て、その日課とす。その二歳に達するに及びて、これに轡を加へ、また、鞍を置くを常とす。かくて、三歳に達すれば、その實力を試験し、次第に、その教育を進めて、七歳に至りて、全く、その完成の域に達す。又、彼の少年騎士も、この七年の間に、その乗馬の練習を終へて、完全なる騎士の地位に達するなり。さ

れば、アラビアの諺に、七年なるかな。七年なるかな。わが友も、われみづからも、皆、この七年間に成育す」といへり。そは、馬も人も、共に、この七年の間に、その教育を終ふることをいへるなり。

よく、馴致せられたるアラビア馬の、よく、長途の騎行に堪ふるは、實に、驚くべきものあり。一騎士の、四五日間、うちつゞきて、騎走し、毎日、三十餘里を走りたりなどいふは、珍しからぬことなり。かくて、一旦、危急の場合に遭遇する時は、飲むこともなく、食ふこともなくして、終日終夜、疾走し、去かも、なほ、綽々として、餘裕

ありとぞ。

アラビアにありては、馬はひとり家畜として、缺くべからざるのみならず、その土人の戦場に出て、勇名を博し、祭場に入りて、威嚴を保ち、集會に列して、盛装を誇る等、皆一に、その助に頼るなり。

勇士の戦場に出づるに當りてや、その家族は、たゞ、ひとへに、わが馬の、無事ならむことを願へり。かくて、若し、その勇士の、馬を失うて、空しく、歸り來る時は、彼等は、頗る、その騎士を恨みて、深く、愛馬の不幸を悲み、快々として、樂まず、數月の間、悄然として、その喪に服

すといへり。

二六、森林

西班牙、および、支那にては、森林を伐り盡して、山に、一木をも見ざるところあり。かくの如き地は、往々、旱魃、うち續き、饑饉となりて、疫病、流行する事あるなり。近くは、我が國にても、福岡縣、和歌山縣などに、洪水起りて、田畑を埋め、家屋、人畜を流して、莫大の損害を受けたることあるも、皆、それがためなり。森林を伐りて、かくの如き害あるは、何故なるか。

山林は、高き處にありて、能く、雲を引く。志かして、山林は、溫度、低きものなるゆゑ、雲は、凝集して、雨となりて、降るなり。然れども、樹木の枝葉茂りて、雨水を支ふるゆゑ、一時に、地上に降ることなし。且又、山林の地には、落葉あり、壙土あり、樹木の根ありて、水の、一時に、流出することなく、まづ、地中に入りて、徐に、溪谷に落ち行けば、大雨の時にも、河川の暴漲すること、稀なり。然るに、今、山林の樹木を伐り拂ふ時は、小雨にすら、忽ち、溪谷に流れ満ちて、暴に、河川を漲溢せしむべし。況や、大雨の、急に、降り下るに、たいてをや。

故に、山林は、雨水の調節機と稱せられて、大雨にも、洪水を起さしめず、大旱にも、河川を涸すに至らずして、常に、河水の分量を、同一ならしむるものなり。山に、樹無きときは、雲きたれども、雨となること易からざれば、河水も涸るゝに至るべく、また、たまたま、雨となることあらば、一時に、溢出して、田畑を、滄海に變ずるに至るべし。これ、その旱魃を招き、洪水をねこす所以なり。

森林は、雨水を調節するのみならず、また、溫度を調節する力あり。すなはち、山林は、夏涼しく、冬暖なり。冬

暖なるは、その寒風を防ぐがためにして、夏涼しきは、樹木が、温熱を吸収すると、枝葉が、陰翳を作すによるなり。

森林は、かくの如き效益の外に、猶、地方の風景を美にす。吾人は、山林を見るに慣れて、別に、その美なるを感ぜざれども、樹木なき元山を見るに及びては、はじめて、樹林の美を覺ゆるに至るものなり。人の喜びて、樹林の傍に、居を構へ、鳥の悦びて、樹林の邊に集るも、これに由るなり。その他、森林は、木材を生じ、菌蕈を生ずるなど、その效用、擧ぐるに遑あらず。

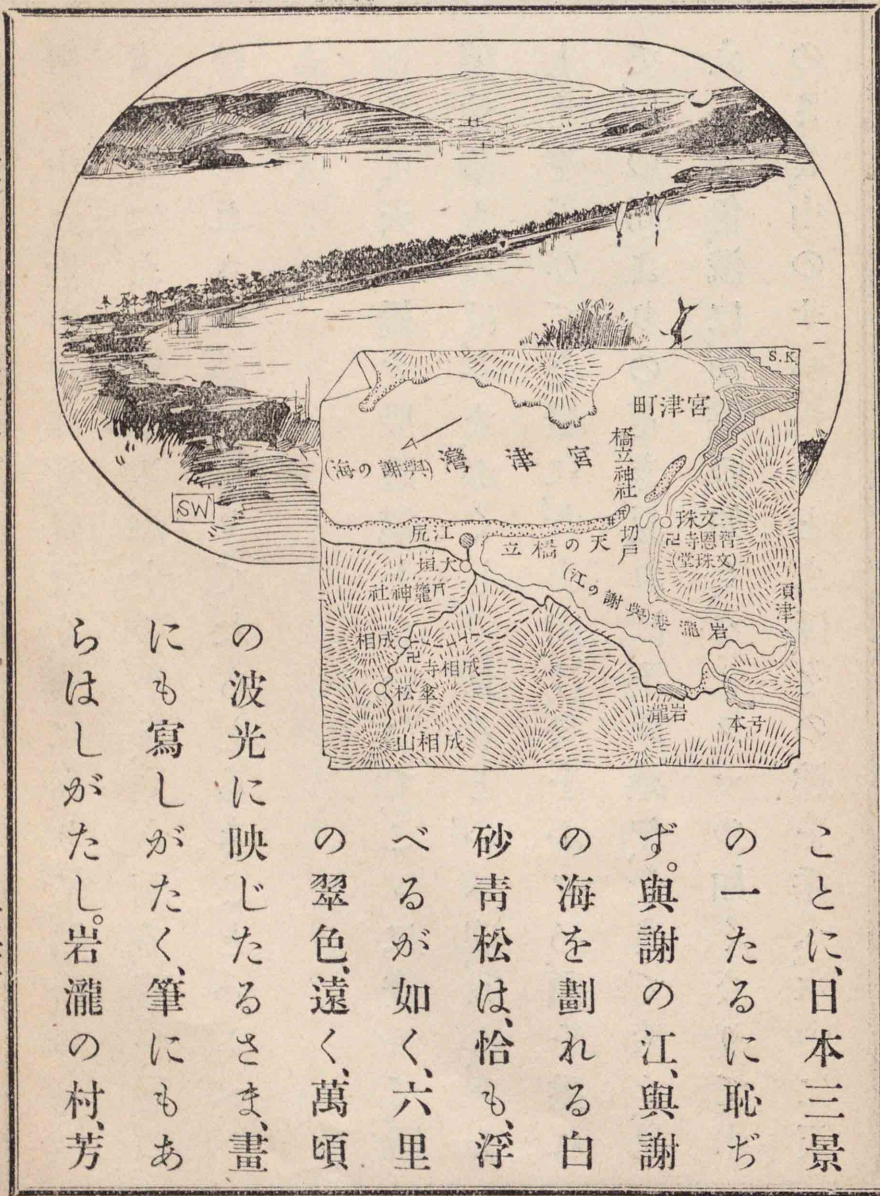
されば、森林は、人類のために、まことに、大切なるものなり。故に、吾人は、森林の害蟲を防ぎ、失火を警め、濫伐を禁じ、大に、これを保護することに注意せざるべからず。(横井時敬)

二七、天の橋立

天、や、曇りたれど、橋立一覽の念、勃々として、とゞめ難ければ、小舟を僦ひて、朝はやく、宮津の客舎を出でて、鏡の如くなる江上を、ゆらゆらと、漕ぎ行く。舟は、小なれど、苦をかけ、毛氈を布きなどして、火入まで備

へたれば、乗ごこち、いとよし。濱邊に權を立てて、網を干したる様の、恰も、晝の如くなる漁村を、左にながめつゝ、漸く、松影の婆娑たる長洲に沿ひ、北に向つてすすむ。

舟子の語り出づる、さまざまの名所話に、耳を傾けつゝ、漕ぎ行く程に、やがて、籠神社の前に著きぬ。社前に茶店あり。志ばし、そこに憩ひて、下駄をば、藁草履にはき換へ、直に、成相山に登る。路は嶮しけれど、苦しきほどにもあらず。右に折れ、左に曲り、上り上りて、傘松の下に至り、首を回して、顧望すれば、眼前の好風景、ま



ことに、日本三景の一たるに恥ぢず。與謝の江、與謝の海を劃れる白砂青松は、恰も、浮べるが如く、六里の翠色、遠く、萬頃の波光に映じたるさま、晝にも寫しがたく、筆にもあらはしがたし。岩瀧の村、芳

野の山、九世の文珠堂は、近く、前にありて、黒崎の鼻は、遠く、左にあり。釣する、海士の小舟、立ち騰る、賤が屋の煙、いづれも、皆、詩趣ありて、たもしろきこといふべからず。

さて、天の橋立股眼鏡とかいひて、こゝに登りて、眺望するものは、みな、かくして見るといへば、我も、をかしさを忍びて、全景に、背を向け、身をかゞめ、頭を垂れて、股の間よりのぞき見れば、不思議や、今まで、淡く、見えし景色、俄に、油畫の如く、パノラマの如くなりて、水のさま、山のすがた、ひと志ほ、その趣を添へ、水中に天

あるかと疑へば、また、天上に水あるが如くにて、長橋の、その間に架せるありさま、まことに、蒼穹に立てる虹ともいふべく、また、海中に漂へる浮嶋ともいふべきなり。

成相山より下りて、ひとり、天橋の松の間を歩みて、橋立明神の所より、また、舟に上りぬ。こゝの松樹は、丈の長短、不揃にて、老いたるもあれば、また、さまで、大きからざるもあれど、下枝は、皆、よく、揃ひて、海波に垂れたる景色、ことに、たもしろし。切戸といふ所に、智恩寺といふ寺あり。山門も、塔も、本堂も、建築、みな、古雅にし

てゆかし。

かくて、それより、龍燈の松、涙が磯などいふ名所を
ば、横にながめつゝ、夕ぐれのほどに、また、宮津に歸り
ぬ。(幸田成行著露伴叢書)

二八、入船出船(中學唱歌)

錨のつなの、たえまなく、
ほしけポトトは、ゆきかへり、
波止場にひどく、こあげ歌、
日に日に賑ふ、みなと口、

あゝ聞きて知れ、國のとみ、
いり船出船の、楫の音、
檣は瀬戸に、林をなし、
水夫に舵手、はせちがひ、
あげ場は人の、なみよせて、
日に日に榮ゆる、みなと口、
あゝ見ても知れ、國のとみ、
いり船出船の、まほの影。

二九、ボアソナード氏を送る詞

余は、一日朝早く、ポアソナード君を、永田町の家に訪ひたりしに、君は、例の如く、文机に憊りて、餘念なく、法條を起草し居られたるが、その顔色、衰へて、常ならず、覺えければ、病やあると、問ひしに、病は、かくこそとて、その足を示されたり。見れば、二つの脚、共に、水色になりて、腫れふとりたり。余は、なにゆゑに、靜に、養生し給はざるかと、問へば、司法大臣と、約ありて、某の日までに、若干の箇條を起草し畢へざるべからず。この義務は、病によりて、背くこと能はずと、答へられたり。余、かつは驚き、かつは、覺束なく思ひて、いそぎ、山田司法

大臣の邸に至り、この由を告げたるに、司法大臣も、ともに、驚かれ、即ち、秘書官をして、君を訪問せしめ、速に、轉地療養あらむことを勧められけり。君は、約束當事者の命を受けて、始めて、心たきなく、田舎に轉養せられたり。余は、この時、家に歸り、ひそかに、嘆息して、いへらく、れよそ、つかさある人々にして、かくまで、に、深き義務心に伴へる勉強を以て、いそしみたらむには、立法事業、并に、諸般の事務の、擧らざることやあるべきと。この事、一小件なれども、余は、將來、ポアソナード君の名譽ある史傳中の一段とすべき價值ありと信ず

るがために、別に臨みて、これを公衆の前に述べ。君の二十年間の立法上の功績のごときは、他の諸君の演述に譲りて、こゝにいはず。

余は、實に、ボアソナード君と、二十年來の友なり。場合によりては、わが師なり。さるを、病のために、餞の席に臨むこと能はざるは、遺憾のきはみなり。いま、書して、君の旅行の安全を祝し、あはせて、左の詞を以て、君を餞す。

「余は、君が、わが國を呼びて、第二の本國」といへりしことを記憶す。余輩は、將來に、遠く、君を、海のあなたに

慕ひ望むと同時に、君もまた、長く、第二の本國を忘れざることを知る。ボアソナード君よ、君の第二の本國が、立法上、及び、諸般の事業に於いて、いかに、發達するかを見て、幸に、余輩のために、必用なる注意と勸告とを怠ることなかれ。(非上毅著 梧蔭存稿)

三〇、故郷

我が故郷を慕ふ情は、われひと共に、變らぬことに、東西の別あるべくもあらず。されば、何處の國人も、皆、我が故郷の美を説かざるはなく、一たび、郷關を出

づれば、堪へがたき望郷の念にうたるといへり。
嘗て、青が嶋といふ南洋の一孤嶋に、火山爆發のこ
とありき。火光、焰々として、天を焦し、はては、石を飛ば
し、灰を降しければ、嶋中の人畜、これが爲に、悉く、斃れ
盡きて、僅に、十餘人の、八丈嶋に逃るゝを得たるのみ。
志かも、この十餘人は、遂に、その故郷を忘るゝこと能
はず、火のやむと聞くや、喜び勇みて、また、その、恐るべ
き噴火の嶋に歸れりといふ。
占守の地は、千嶋の内にありて、窮北不毛の地なり。
たゞ、氷雪の、累々として、相依れるを見るのみなれば、

開拓使廳は、土人に令して、南の方、色丹嶋に移らしめ
たり。色丹の地は、樹林、まげく、河川、その間に流れ、鳥獸、
その蔭に集り、田園の收穫、また、頗る、多きところなり。
さるを、遷徙の土人等、皆、この新樂土を喜ばずして、歸
心、矢の如く、遂に、相率ゐて、再び、その、窮北不毛の故嶋
に逃れ歸らむとせしといふ。

往年、米國シカゴ博覽會の舉ありし時、その中に、エ
スキモー土人の部落を置き、數多の土人を伴ひ來り
て、そこに住ませたることありしが、彼等は、この文明
繁華の地にありて、衣食に、住居に、無限の快樂を享け

ながら、猶も、故郷の空忘れがたく、幾度も、その、氷山雪塊の殊境に逃れ去らむことを企てたりといふ。

まことに、もろきは、人の情なり。いかなる他郷の樂土も、故郷の住みよきに比ぶれば、物の數にもあらず。何處の國人も、皆、その口を極めて、わが故郷の美を説き、望郷の念に驅らるゝも、たもへば、止むを得ぬことなるべし。

されど、これらは、たゞ、單に、故郷を戀しといひ、忘れ難しといふに過ぎず。我等は、更に、我が故郷に向つて、まことの愛情をさゝぐべき務あることを思はざる

べからず。いかにせば、我が故郷の名を、大にすべきか。いかにせば、我が故郷の名を、世界にも耀し、後の世にも傳ふることを得べきか。これ、その郷人の、朝夕に、忘るべからざる務なり。コルシカの一孤嶋は、その嶋民ナポレオンによりて、不朽の名を、青史に輝したり。三河の國名は、その三河武士によりて、ゆかしき名を、國史に垂れたり。これらは、まことに、その郷に忠なる好例にあらずや。

抑も、郷を愛する念は、やがて、國を愛する心なり。國を愛する心は、やがて、我が金甌無缺の國體を、千古に

傳ふべき道なり。一郷に人たり、一國に民たるもの、その郷國を慕ふ情を進めて、更に、その郷國を愛する情を、盛にせざるべからざるなり。

再訂中等國語讀本卷一終

明治二十八年十一月十五日再訂改版印刷
明治二十八年十一月十八日再訂改版發行
明治二十九年二月十六日再訂第二版印刷
明治二十九年二月二十日再訂第二版發行

全十册
定價各卷金廿五錢

著者 故落 合直文

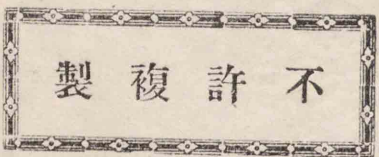
相續者 落合直幸

補修者 明治書院編輯部

發行者 三樹一平
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 宮本敦
東京市神田區椎子町三十四番地

明治三十三年九月二十二日
文部省檢定濟
(中學校國語科用)



發行所 販賣所

東京市神田區錦町一丁目
(特電話本局二四三八番)
東京市神田區南乗物町
(特電話本局八九二番)

明治書院
明治圖書株式會社

